

梅と菊
～新島襄を覚えて

越川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

(フィリピの信徒への手紙 3章 12—14 節)

「旅する人」

新島襄が亡くなったのは1890年1月23日のことです。今年でもなく131年を迎えることになりました。46才と11カ月という47年に満たない人生でしたから、今の感覚で言えばずいぶん短い生涯でした。

新島襄の生涯はある意味で「旅する生涯」だったと言えると思います。新島は生涯の間に「世界旅行」と言える旅を2回経験していますが、当時の日本人としてはたいへん珍しいことでした。日本国内でも北海道から九州まで実にさまざまなところを訪れています。それはキリスト教の伝道のためであったり、教育事業のためであったり、各地で活動している教え子たちを励ますためであったりしましたが、特にその晩年は大学設立という大きな目的のために、各地に人を訪ね、協力や支援を求めて旅する日々が続きました。

新島が旅先から、京都に残してきた生徒たちや学校の様子を案じて出したいくつもの手紙が残されています。その一部をご紹介します。

「同志社の近情は如何。

よしの山花咲く比(ころ)の朝な / \ 心にかゝる峰のしら雲

古人の歌に詠ぜしごとく、小生の心は日夜、諸君を忘るる能わず。何事を聞くにつけても、今は諸君は如何あらんと心配いたし居り候」(横田安止宛書簡／一八八九(明治22)年12月30日、同志社編『新島襄の手紙』岩波書店2005年316頁)。

こうした旅の途上、1889年11月、新島は群馬県前橋で発病します。療養のために神奈川の大磯に移りますが、治療の甲斐なく、翌年1月23日に急性腹膜炎で死去しました。新島はまさに旅の途上で亡くなったのです。

「出会いの人」

さて、「旅する人」であった新島は「出会いの人」でもありました。と言うよりも、新島の旅が出会いの旅であったと言うべきかもしれません。新島襄はその生涯に数多くの人と出会い、数多くの人に支えられ、また数多くの人々を支え、導き、育てました。新島の幼少期から日本脱国に際して、およそ10年に及ぶアメリカ滞在中も、また日本に戻ってきた後も、新島が出会った重要な人々を挙げていけば切りがありません。新島は実に多くの人々と出会い、そして不思議なほど多くの人々が新島を受け入れ、新島を支え、新島から影響を受けました。

こうした新島の生涯を「運のいい人」と表現することもできるかもしれませんが、決してそれだけではありません。新島は「旅の人」であり「出会いの人」であると同時に、彼がその人生の旅の中で出会った人々を動かさずにはおかない「熱意の人」であり「志の人」でもあったのです。

「涙徳の人」

新島襄を「涙徳の人」と表現した人物がいます。「涙徳」、すなわち「涙の徳」という聞き慣れない言葉ですが、同志社英学校の第一期卒業生だった浮田和民という人が、新島襄が亡くなって3カ月後に開かれた記念の会で次のように述べたと言います。

「（新島襄は）涙徳の人であった。（中略）いつも真心を尽くし、涙をもって人の心の中に語りかけるので、先生の説には感心しない者であっても、先生の涙徳に感動しないことはなかった」（同志社社史資料室編『追悼集』I 1988年 49頁）。

新島が涙を流しながら語ったという話はいくつも伝えられています。卒業式に際して涙を流しながら式辞を述べて教え子を送り出した話もありますが、たぶんもっともよく知られているのは、1875年の同志社英学校の開校にあたって新島が流したという涙でしょう。新島と共に同志社英学校のもう一人の教師であったジェローム・デイヴィスが書き残した文章があります。

「同志社は十一月二十九日の朝八時、新島の家での祈祷会をもって正式に開校した。それには六人の生徒が参加した。その後全員が校舎の方に移動し、あと二人の若者を迎えた。（中略）『あの朝開校に先立って新島氏が自宅で捧げたあのやさしい、涙にみちた、まじめな祈りを私は決して忘れることができない。すべての者が心から祈った』」（マール・J・デイヴィス 北垣宗治訳『宣教の勇者デイヴィスの生涯』学校法人同志社 2006年 181頁）。

新島がよく涙を流したというのは、たんに彼が感情的感傷的な人間だったという意味ではありません。新島は情緒豊かな人物でありましたが、同時にきわめて沈着冷静であり、ものごとを厳密に合理的にとらえる人でもありました。目的をしっかりと見定め、その目的に向かって着実に前進する人でした。決して簡単に投げ出したり、引き下がったりしない。そういう点では、驚くほど粘り強くしつこい性格の人でした。新島は情熱的であると同時に、その情熱を持続させることのできた人であり、たとえば思うようにいかない時にも、目的を抱き続け、じっと耐え忍びながら何度でも働きかけ、繰り返しチャレンジした人だったのです。

なすべきことはただ一つ

そうした新島の性格を伝えるエピソードがあります。1879年2月、新島襄は幕末維新の功労者の一人である勝海舟に面会し、同志社大学設立の協力を求めました。しかしその場で勝海舟は一人延々としゃべり続けたあげく、厳しく新島の願いをはねつけたと言います。勝海舟自身が「新島にはひどく言ってやしたが、怒ってしまった」と語っていたそうです。新島襄と勝海舟の最初の出会いは失敗だったと言えます。

新島のすごいところは、その後も勝海舟に対して粘り強く説得を続け、ついには大学の設立に協力するという約束を取りつけるにまで至ったことです。最初の対面から5年後、新島は勝海舟への手紙で次のように書いています。

「なお、五年前、非常に御タタキ下され候先生の御言葉は、却（かえ）って今日の結果と相成り、また今日、先生のご賛成は五年、十年、否、数百年の後の美果と相成り申すべく候」（勝海舟宛書簡／一八八八（明治21）年11月19日、『新島襄の手紙』263頁）

新島が書いた他の手紙の中にも、次のような言葉が出てきます。

「ほかの人がすることに心を悩まさないようにしてください。自分の仕事に集中し、それを断固前進させてください。日本でもっとも必要とされるのは、着実にゆるぎなく、常に根気強い働きです。弱気になったり、落胆したりしなければ、私たちはそうした働きができ、目標に到達するのです」（小崎弘道宛書簡／一八八四（明治17）年12月29日、同192—193頁）。

この言葉は相手を励ます言葉でしたが、同時にそれまで新島自身の歩んできた歩み、そして新島の苦勞や課題を映し出す言葉でもあるように思います。また新島自身を励ます言葉でもあったのかもしれませんが。

先ほど読んだフィリピの信徒への手紙3章13節以下において、最初期のキリスト教会のリーダーの一人だったパウロは次のように記しています。

「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」。

新島が先ほどの手紙を書いた時、パウロのこの文章を思い浮かべていたのかどうか分かりません。しかし、いちばん必要なことは「着実にゆるぎなく、常に根気強い働き」をなすことであり、「弱気になったり、落胆したりしなければ、私たちはそうした働きができ、目標に到達するのです」という新島の言葉と、「なすべきことはただ一つ、（中略）目標を目指してひたすら走ることです」というパウロの言葉とは、お互いに響き合うものがあるように思うのです。

「寒梅の詩」

さて、今日の奨励題に「梅と菊」というタイトルを付けました。新島の書いた文章に出てくる梅と菊にかかわるエピソードを通して、新島の生涯、志、そして生徒や学生を初めとする他者に対する思いについて考えてみたいと思います。

まず「梅」です。最近では同志社のキャンパスでも、とくに京田辺などは梅よりも桜の方がずっと多くなってきたようです。桜というと入学式、大学生活のスタートをイメージしますが、梅はどうかと言えば、むしろ大学生活の終わり、卒業式、そして社会への旅立ちというイメージかもしれません。ともあれ、新島を思う時

にまず思い浮かぶのは梅の方です。

新島が残した「寒梅」の漢詩を思い出してください。

「庭上一寒梅 庭上の一寒梅
 笑侵風雪開 笑って風雪を侵して開く
 不爭又不力 争はず また力(つと)めず
 自占百花魁 自ずから占む百花の魁」
 (新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』5 同朋舎出版 1984年 496頁)

寒さの中、庭に梅が咲いている
 笑うが如く、風雪に耐えてその花は開く
 争うことなく、また力むこともなく
 まことに自然に、すべての花に先駆けて咲くのだ
 (現代語訳は筆者による)

ちょうど今、この礼拝堂の入口のところに植えてある紅白の梅が咲き始めています。まだ冬の只中ですが、まさにその寒さの中でポツポツと鮮やかな白と深い赤の花が開き始めています。

この季節に他に先駆けて花開く梅の花は、世に先駆けて日本を脱国し、新たな学問を学び、キリスト教とキリスト教主義に基づいた教育を日本に伝えるために走り続けた新島襄その人の姿に重なるところがあります。新島襄はこうした梅のイメージをととても好んでいたようで、この漢詩の他にも深井英五という方に与えた色紙の中に、「真理は寒梅の似(ごと)し。敢えて風雪を侵して開く」という文章を残しました。

ところで私の家にも一本、白梅があります。最初、1メートル足らずだったのが、20年ほどで家の2階を超えるような高さまで成長しました、それはいいのですが、なんともその枝の伸び方というのが、めちゃくちゃというか好き放題というか、他の木に比べて本当にわがままな伸び方をする木であることに気づきました。こんな枝の伸ばし方をしたら自分自身でも困るだろうにと思うようなへんな木ですが、その代わり桜などに比べて強い木であるとされており、多少、枝を折ったり切ったりしても弱ることのない木であると言います。新島はそのあたりのことも知った上で梅を好んだのかもしれませんが。

新島はその遺言の一節において、同志社では「倜儻不羈なる書生を圧束せず、努めてその本性に従い、これを順導すべきし、もって天下の人物を養成すべき事」(『新島襄全集』4 1989年 403頁)と述べています。常規では律しがたいような学生であっても、これを圧迫することなく、その学生の本性と才能が開花するように導くべしということです。

新島は教え子たちが高い志と良心をもって信じる道を歩み続けてほしいと思っていました。冬の風雪の中に開く梅はまた春を予感させる花でもあります。同志社がそうした寒梅のような人物を世に送り出すことを新島は望んだのだと思います。

菊苗の追伸

さてもう一つは「菊」です。

先ほど申しましたように、新島は旅の途上で発病し大磯で療養したのですが、死を前にして記した手紙の一つに京都にいた妻・八重宛ての1月17日付けのものがありません。死去する6日前のものです。これは新島の手紙としては珍しいことに、ずいぶんユーモラスな内容の手紙です。宿屋の人々は皆気の長い人たちばかりで主人も下女も朝寝坊、手を叩いて呼んでも全然急ぐ様子がない。医者も同じことで、呼んでから半日も経ってようやくやって来る。自分だけがせっかちなように感じられると記し、「イヤ、いや、短気に生まれたが親譲り、我の不幸だと独り自ら諦め申し居り候」（新島八重宛書簡／一八九〇（明治23）年1月17日、『新島襄の手紙』326頁）と述べています。この手紙の最後、追伸として記された文章に「菊」の話が出てくるのです。

「米国より参り候菊苗の上にシッカリわらをかぶせ、寒気のために傷（いた）まぬようなし下されたく候。太陽がただ南よりあたるような、しおき下されたく候」（同 327頁）。

事情は分かりませんが、アメリカからわざわざ京都に菊の苗が送られてきたようです。新島はその苗に「シッカリわらをかぶせ」、寒さに備えてやってほしい、そして「太陽がただ南よりあたるよう」に面倒を見てやってほしいというのです。季節は今と同じ冬ですから、春が来て、夏が過ぎ、菊が咲く秋になるまで、まだまだ先のことです。私は菊という花を育てたことはありませんが、立派なものになるとずいぶん細々と手を入れてやる必要があるのでしょう。寒のうちに肥料をやったり土を入れ替えたり、寒さにやられないようにわらで囲ったり、南向きに太陽に当ててやったりということが必要だったのでしょう。新島はそれを知っていて、遙か遠い京都にある菊の苗、それも半年以上も先に咲くであろう菊を覚えて、よろしく育ててほしいと頼んでいるのです。新島はそれまで自分が生きながらえていると思っていたのでしょうか。

私はこの追記を読んだときに、ここには人を育て、学校を育て、キリスト教という新しい宗教を日本において育てていこうとしていた新島の生涯の一面が、象徴的に描かれているような思いがいたしました。一人ひとりの人間も、また一つの学校も、決して簡単に育つわけではなく、それらが花開くまでには多くの手間ひまと細やかな配慮、そして豊かな愛情と熱意が必要なのです。

新島は「敢えて風雪を侵して咲く」という「寒梅」のような活力溢れる学生を愛しましたが、それと同時に学校の中の「元気なきものも、御見捨てなく」（同 317頁）という一文も残しています。新島は、「小生平素の目的は、（中略）我が校をして深山大沢（だいたく）のごとくになし、小魚も生長せしめ、大魚も自在に発育せしめ、小魚大魚、各（おのおの）その分に応じ、その身を世に犠牲となし、この美しき日本を早晩、改良して、主の御国（みくに）、すなわち黄金時代に至らしめん事は、小生の日夜、熱祈して止まざるところなり」（同 316—317頁）と記しています。一人ひとりの学生の個性を大事にし、それぞれがこの世に奉仕し、良き社会を実現する者となるように育てたいというのです。そこには半年先を見据えて、冬の寒さから菊の苗を守ってやってほしいと記した新島の願いに通底する思いがあるように感じます。

新島襄は「寒梅」のように生き、また未来に咲く「菊苗」を育てた人でありましたが、その新島自身、実は神の計り知れない恵みと深い配慮によって、そのような生涯を許され、また育てられた人であったと思います。

新島は先ほどの手紙で記した菊の苗が花開くを見ることなく亡くなりました。同じように新島は同志社大学の誕生を目にすることもありませんでした。しかし神は新島が願ったように、新島が始めた働きを長い時をかけて成長せしめ、日本におけるキリスト教宣教において、またキリスト教主義学校の働きにお

いても、さまざまの花を咲かせてくださいました。そうした花は今も咲き続けています。

ここにはこの3月で同志社を巣立っていく人もおられるかもしれません。それぞれのこれから先の人生が、神によって守られ導かれた豊かなものとなることを心から祈ります。願わくは、お一人お一人に与えられた人生において、それぞれユニークな花を咲かせてくださることを祈ります。また願わくは、その花がただ自分自身のために咲くだけでなく、皆さんの隣人とこの世界のためにも咲くものとなることを祈ります。

2021年1月20日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録